

Special Essay

電子ジャーナル

医学図書館長
神田 芳郎

最近の医学雑誌は大部分が電子ジャーナルになっている。実際、編集者とのやりとりも投稿からリバイス、アクセプトまですべて電子化されている。私が医学研究を始めた25年前はすべてが郵便でのやり取りだったことを考えると隔世の感がある。以前は論文を投稿したら、郵便で最初の決定の通知が届くまでの2~3か月はその仕事のことを忘れていられたのだが、最近はその期間が1か月程度に短縮されている。ひどいときは投稿した翌日に編集者からお断りのメールをいただくこともある。「少しの間でいいから夢を見させてくれよ。」と嘆いてしまうことも度々である。

このように論文の掲載がスピーディーになるということは、それだけいつも尻を叩かれているようで、またアクセプトを期待する期間が短くなって、研究者にとっては大変であるが多くのメリットもあると思う。まず一つには電子投稿は郵便と違ってお金がかからない。作図もずいぶん楽になったし、やはりお金がかからない。私のようなケチな人間には大変ありがたいことである。もう一つの利点は電子化により昔に比べ文献検索が格段に容易になり情報が共有されやすくなったという点である。以前はいわゆるインパクトファクターの高い一流誌に掲載されていない論文はかなりの確率で見落とされ、重要な内容を含んでいても他の論文に引用されないケースが多かったが、最近では情報が得やすい分そのような可能性は（皆無ではないし、一流雑誌に掲載されている論文は一般的に重要な内容を含んでおり、いまだに被引用に関して大変有利であるが）低くなってきているように感じる。研究論文を一流誌に載せたいという意気込みと努力は研究者にとって大切なことであるが、もしそれが叶わない場合でも、自分達の出した結果をどこかに発表することは必要だと思う。また最近では PLoS ONE のように研究自体が正しい方法で行われているか否かについて重点的に審査し、その研究の科学的意義は読者の判断に任せ、受理した論文に対して広くブログ等により議論してゆくという形態をとるフリーアクセスの雑誌も出始めている。なかなか一流誌に論文が掲載されない者のひがみでもあるのだが、現代のような情報化社会では、一昔前に比べて情報を発信することにより意義があると感じている。

同様に図書館も昔のようにただ単に雑誌や専門書を並べているだけでなく、小さなことでも良いので利用者に有益な情報を発信できる施設であるべきだと思う。そのような医学図書館に少しでも近づけられるよう医学図書館長の任期中に努力してゆきたい。またその実現のためには医学図書館が近い将来医学情報センターに改組されれば良い、と願っている。

